
砦物語

ねむりねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砦物語

【Nコード】

N3936BA

【作者名】

ねむりねこ

【あらすじ】

王国の中にあつて王国のものではない砦の中の人々の、なんということはない日常。

基本ほのぼの、たまにシリアス。
念のためR15にしておきます。

序（前書き）

突発的に書きたくなくて勢いのままはじめて投稿しました。
よろしく願います。

序

深き森の裾に古き砦あり。

国に在りて唯一、国に従わざるもの。

彼の砦が守るは、人の定めし境にあらず。

砦は、在るがままに其処に在る、不可侵の域なり。

砦を治めるもの、すなわち門の守り人。

守り人は世界に与えられし恩恵。

障らず、侵さず、繋がざるもの。人の手には余る輓くびき。

故に、人の法のりにて従えることあたわず。

平穩を望みし人よ。

忘れるなかれ。違えるなかれ。

約定破られし時、門は開かれる。

彼方に視ゆるは終焉なり。

序（後書き）

投稿の仕方がわからない…。

一話 振り向けば

柔らかな陽射しの中をゆっくりと進む騎馬があつた。

馬に揺られながら辺りを見回しているのは、まだ幾分幼さの残る顔立ちをした少年だった。

外套を羽織っているために定かではないが、あまり体格はよろしくないようだ。手綱を握る手や鎧に乘せている足を見る限り、まだまだ成長途中であるのが窺える。

周囲を見回していた少年は視線を前に戻すと、本日何度目かになる溜息を吐く。

「…田舎だな…」

と、住んでいる者が耳にしたなら《むかつ》としそうな発言も、まあ同意できなくもない。

何せ少年の進んでいる道は、馬車が通れるくらいの幅はあるものの舗装されておらず、獣道に毛が生えた程度（少年の感想）にでこぼこしている。道の周囲はやたら太い樹が視界を遮り、たまに開けたかと思えば牛が長閑に牧草を食んでいるような牧歌的な景色ばかり。「いくら辺境つつたつて、あんまりじゃないか…？」

憤る、というよりはやや不安の滲んだ声がこぼれる。

この三日、街と呼べる人里はなく、宿すら疎らにある民家に頼むか野宿という状態なのだ。しかも、今日は周囲の樹木が全く途切れる様子が無い。つまり、森の中である。

「道、間違えてない…よな…？」

道幅がそれなりにあるため、陽射しがまったく遮られているわけではないからいいようなものの、これで薄暗かったらかなり不気味だと少年は思う。

進めば進むほど深みに嵌るような錯覚に少年は首を軽く振り、馬の足を速める。

陽が中点を過ぎいくらか傾いた頃、ようやく目の前が開けた。と、

言っても街が見えたということではないのだが。

そこには一面の畑があった。そして喜ぶべきことに、今日初めて目にする人影と、畑の向こうには石造りの大きな建物。

近付くと人影はほつかむりをした女性だと分かった。スカートを履いていたからだ。背中を向けているので年齢は判らないが、農婦にありがちな恰幅の良さはなくほっそりとした体格をしている。それでも手に持った鋤を振るう動きにぶれはなく、ザクザクと耕していく様はなかなかに見事なものだった。

「その者。あそこに見えるのはグランデイルの砦に相違ないか？」
馬上から降りることなく声をかけた少年に、農婦が鋤を持つ手を止めて振り返る。

「…君、だれ？」

訝しげな声音で訊き返す無表情な顔の持ち主は、少年と大して違わない年頃の若い娘だった。

一話 振り向けば（後書き）

え、エラーでまわります…なぜでしょう？

二話 出会い頭に喧嘩腰

少年は驚いた。

農婦が年若い娘であつたこともだが、返された無礼な口の利き様が今まで自分に向けられたことのないものだつたからだ。

少年たちが住まうこの国はアルスディア王国と呼ばれる。王国と示す通り頂点に王が座し、その下に貴族、平民と続く明らかな身分制度があるのだ。平民は王族には服従、貴族に逆らうことはできない、と教育される。わざわざ言わずとも、常に差別されることによつて身分というものを心に沁み込ませるのだ。

娘はどこからどう見ても平民に見える。対して少年は鎧こそ身につけてはいないが、乗馬している上に王国の騎士の旅装であり、明らかに娘よりも身分は上だ。これまでの旅程で幾分草臥れてはいたが。

咄嗟に二の句が継げず、自分を凝視する少年を娘もまたじつと見続ける。やがて不快を顕わにした少年が吐き捨てるように言った。

「無礼な娘だな。口の利き方がなっていない」

睨まれた娘の方とは言え、何が無礼なのか全く分からないと言いたげにきょとん、と首を傾げ、唇の端を微かに吊り上げた。

「馬に乗ったまま、ものを尋ねるのは礼儀に適っているのかしらね、おぼっちゃま？」

「貴様っ……！」

かつとなり無意識に腰に伸びた少年の手を、娘はじつと見て嗤った。

「気の短いことだわね。君はここに何をしに来たわけ？まさか気に入らないやつを片っ端から斬りに来たの？身分自慢で威張りたいらとつと帰った方がいいわよ」

「お前……！黙って聞いていればべらべらと！無礼にも程があるだろっ！」

怒りのために赤味が増した少年の険しい顔を、娘は怯えることなく見上げる。

「全然黙ってないと思うんだけど。まあ、いつか。何の用があるのかは知らないけど、確かにあれがグランデイルの砦よ、騎士サマ。お手打ちにしたいと言うなら構わないけど、やってみる？」

終始不遜な態度をとる娘に腹が立ち、いつそ本当に手打ちにしてやるつかという思いが少年の脳裏に浮かんだが、これからのことを考えれば赴任先でいきなり刃傷沙汰を起こして心証を悪くするのは拙い。だが、平民でありながら無礼に過ぎるこの娘を放置したままでは沽券に係わる。

どうするべきかと睨みつけている少年と見合ったままだった娘の視線が、不意に逸れた。つられて少年の視線もそちらへと向く。いつの間に近付いたのか、そこには呆れたような顔をした男が一人。

「何をしている？」

掛けられた声は低く、かなり着崩れているが騎士の略装であり、おそらくは砦の騎士だろうと少年は初めて馬から降りた。

「お初にお目にかかる。グランデイルの砦の騎士殿と御見受けする。私はキール・ラグナス。此度グランデイル砦配属を任命され赴任した次第。以後よろしく願います」

「……」

きつちりと騎士の礼を取った少年　キールに男は一瞬目を眇め、やれやれといった風に頭を掻いた。

「…固いな。やっていけんのか、これ…？」

「やっていけなきゃ帰るでしょ」

お互いに苦笑しながら言い合う娘と男に、キールはむっと眉を寄せる。

「まゝいつか？つーか、俺のそもその用事はお前だ、リイル。サティスがお茶の時間に帰って来ないって怒ってたぞ？」

「あれ？もうそんな時間？」

「そんな時間だよ。さっさと帰れ」

「はあゝい。じゃあ、またね、おぼっちゃま」

ひらひらと手を振り、リイルと呼ばれた娘は軽やかな足取りで皆へと向かっていく。

「おぼっちゃまと呼ぶなっ!!」

繰り返される無礼な発言に怒りを再燃させたキールが、遠ざかるリイルの背に怒鳴りつける。と、目の前の男が面白そうに笑った。

三話 おやつは控えめ希望

ぶんすかと憤るキールを笑みを浮かべたまま興味深そうに眺めていた男は、服こそ着崩しているもののよく鍛えられていることが分かる精悍な身体つきをしていた。

「さて、新入り殿。俺達も行こうかね。俺はユール・ミルド。一応一番隊の隊長つてことになってる。よろしくな」

「はい」

「それから、うちの皆の連中、堅苦しいのかなり苦手だから。できれば砕けた言い方をした方がいいぞ？」

「はい？」

砕けた言い方とは一体どんなものか。

今までいた場所では言われたことのない内容にキールは眉を寄せる。

「少年、今いくつ？」

笑みを崩さないままユールは尋ねる。

「今年15になりました。叙任されたばかりですので」

「おお、若いね。そっか、リイルと一緒にか。こりゃあ、面白い」

楽しそうに笑うユールに首を傾げつつ、キールは先程の娘が同い年であることを知る。

「リイル、とは…先程の娘の名のようですが…いったいどのようなお知合いなのでしょうか」

「あー…リイルは名乗らなかったのか。うん、まあ、その内判るんじゃないかな」

「判る…？農民の娘でしょう？」

関係を訊いたのに何やら別の含みがあるようで、キールはわけがわからないといった表情を浮かべる。ユールはその顔を見ながら特に何を言うでもなく皆へと足を向けた。

「うん。その内その内。ほら、さっさと行くぞ」

「え？あ、はい！」

納得できない気持ちのまま、キールは馬を引きながらユールの後を追った。

*

「リイル！ちゃんとお茶の時間には帰っていらつしゃいと、毎度毎度誰かを迎えをやらないと解らないのかしらあ！？」

柳眉を逆立てるとはこういうことか。

栗色の髪を奇麗に結い上げた美女が怒る様というのは、全くもって逆らい難い。一応神妙にお小言を拝聴しつつ、リイルはそつと上目遣いで美女を眺める。

「あなたはただでさえ細過ぎるんだから、三度のご飯だけじゃ足りないのよ！」

「いや、でも、サティス？あのね……」

「言い訳は聞きません！言われたくないのならもう少し肉をつけなさい！」

「いや、肉つけろって言われても……」

無茶である。体質的につけたくてもつかないものはしょうがない。言い返そうとしたリイルだったが、怒っていたサティスはその奇麗な顔ににっこりと笑みを浮かべた。それはそれは奇麗な、リイルにとつてはとても怖い笑みを。

「なんなら毎日のご飯、倍にしてあげてもいいのよ？」

「ゴメンナサイ。ソレダケハヤメテクダサイ、オネガイシマス……」

此处、グランディル砦の台所を預かるサティスに逆らえるつわものは滅多にいない。健康な身体の基本は食事から！を声高に叫ぶ美女に何をもつてすれば逆らえるというのか。そして、もともと食の細いリイルには食事の量が増えるというのはとても苦痛なことなのだ。返事が棒読みで遠い目になってもちよつと仕方のないことかもしれない。

「もつつ！しょうがない子ね。まあ、今日のところはこれで許してあげる」

そう言つて差し出された皿には小さめのサンドイッチと林檎のタルトが乗せられていた。

「…多い…」

「あら、それでも野郎共の三分の一よ？あなたは人一倍動き回っているんだから、このぐらいは必要なのよ。頑張つて食べなさい」

「ふあい…」

ぱくり、とサンドイッチを口に放り込む。一口サイズなので食べやすく、塩気の効いたハムと野菜が美味しい。もう一つは胡椒の効いた卵である。どちらもリイルの好物だ。もぐもぐと口を動かしている間にサティスがお茶を淹れてくれた。ほんのりと甘みのあるこのお茶もリイルが好んで飲むものだ。

「ねえ、サティス」

「なあに？」

小さなサンドイッチを飲み込み、タルトの端をフォークで崩しながらリイルは年上の友人に話しかける。

「さつきね。新しい騎士に会つたよ」

「あら。…どうだった？」

目を細めるサティスにリイルは慎重にタルトをフォークで刺しながら（タルトは油断するとボロボロと崩れるのだ）笑みを浮かべる。

「ものすつごい、生意気なおぼっちゃま！」

「あらあら。ふふふ…それは楽しみねえ」

「何日もつかなく」

「賭けましょうか？」

「それはダメ」

ぱくん、とタルトを口にして満足げに目を細めたリイルに、サティスは意外そうに片眉を上げた。

「…育てた方がいいのかしら？」

「たぶん。お願いね？みんなにも言つて」といって

「わかったわ。逃げ出さないよう扱きましょう」

「それと、わたしのことは内緒で」

「…どうして、って訊いていいかしら？」

「面白いから」

「リイル…」

あんまりな理由にサティスは呆れつつ額に手を当てる。

今度の新入りは余程リイルの癪に障ったようだ。それでも追い出す方向に考えないのは、面白いとは別の理由があるのだろう。

「ねえ、サティス」

「なあに？」

タルトを半分片づけたリイルが皿の上を見つめながら声をかける。

「明日は林檎のパイがいいな」

「…はいはい」

くすくすと笑いながらサティスは崩れるタルト生地と格闘するリイルの頭を撫でる。明日から少しばかり忙しくなりそうだと思いつながら。

三話 おやつは控えめ希望（後書き）

話が進むごとに長くなってる気が…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3936ba/>

砦物語

2012年1月10日09時53分発行